

■結びにかえて

シリーズ本の企画を考える全障研の研究推進委員会の議論の中で、障害のある当事者からも発信するべきではないかという声があがり、議論を重ねてきました。

僕は先天性の障害ですが、中途障害を負った方の「障害受容」についてもとりあげたいと思いました。人選にあたっては、受傷前から障害者運動に関わってきた井上さんに「障害受容」のプロセスも含めて書いてほしいとお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。

僕が井上さんと出会ったのは、1994年に京都で開かれた全障研大会のころです。出会って20年以上が過ぎましたが、3つの姿が記憶に残っています。1つは京都駅前での「マラソンスピーチ」のスタッフとして奮闘している姿です。2つめは政治革新のために京都市長選で障害者の置かれている状況を変えるために奮闘している姿です。そして3つめが、岡山の川崎医大病院でリハビリに奮闘する姿です。

木全さんとは、全障研の研究推進委員会の中で成人期の分野で一緒にするようになり、議論をしてきました。ご自身も中途障害者であり、この本でも企画段階から一緒に考えてきました。

二人の手記でも、インタビューでも「障害は迷惑か」という問いかけをしてきたつもりですが、木全さんが書かれたように「人間の権利」「差別」「迷惑」「合理的配慮」というキーワードを関連づけながらさらに深めていく必要があることが明らかになりました。

僕は、障害をもって生まれました。そして、成長していくなかで「自らの障害」を「受け入れ」てきました。障害をもって生きていくうえで自らの「障害」を受け入れることは、自分の「できること」「できないこと」を理解し、「できないこと」は他人（社会的）に「支援してもらう」ことで、自

分らしい生活と社会参加を手に入れることができました。

僕は、日ごろはあさひ共同作業所でリサイクルを担当しています。知的障害の仲間と「空き缶回収」に回ったり、プレスしたり廃棄電線の作業をしています。回収で回っているとき、カーラジオで「国会中継」を聞いていると、ある仲間が「安倍さんはいかん」とつぶやきました。そのときは、「そうやねえ。じゃああなたが大臣になるかい」「まっちゃん（僕のこと）がやったらええや」などとやりとりしたのですが、知的障害の重い仲間も家族や職員の話を心にとめているんだなあと思うことがよくあります。今年のメーデーには、彼らと参加しました。集会の後のデモ行進も福祉保育労と一緒に隊列で「障害者に働く場を」「障害者福祉の予算を増やせ」と大きな声でシュプレヒコールをあげてきました。労働者として、主権者として、彼らとともに社会にアクションを起こしていかなければならない、と強く感じました。

*

国際的に「障害者の権利条約」がつくられているなか、日本では「制度の維持」のためにと「応益負担」の福祉制度が導入されました。その後の「違憲訴訟」で国は「障害者の尊厳を傷つけた」と謝罪し、「基本合意」に基づく「制度改革」をすすめること約束しました。基本合意から5年が経ちましたが、「制度改革」はすすむどころか後退し、介護保険との統合が政治的日程にのぼろうとしています。その裏側では、「戦争する国・日本」への準備が着々とすすめられています。

障害者は戦争のない平和な社会でなければ生きることができません。戦争が障害者を生み出す最大の原因でもあります。日本が世界に誇る憲法を守り続け、障害者がさらに社会でイキイキと生活できることを祈ってやみません。